

現代伝説の日中比較研究

— 「学校の怪談」を中心に

李 軒 羽

はじめに

「現代伝説」また「都市伝説」とは、現代社会で語られている「友達から聞いた」「知り合いに起こった」とされる、根拠が曖昧で、不明な説話である。昔話のような特定の形を持たないので、世間話に分類される、口承の形で語り継がれるのが一般的であるが、インターネットの発展に伴い、SNS上で「電承」されるようになり、「ネットロア」という造語も使われる。

日本での現代伝説研究といえば、「口裂け女」「人面犬」などの先行研究が、有名である。その他の話に関心を寄せる日本人研究者も少なくない。

中国でもたくさん現代伝説が存在している。「微信^①」などメッセージの利用者数の激増によって、うわさ話が伝播されやすくなり、現在でも新たな現代伝説が作られ語られている。中でも、「微信」の「朋友圈」(Facebookのタイムラインに

似たような機能)で「何を食べたがんになる」^①型のうわさが、さまざまな人間関係を通して流布されている。後から登場人物やオチが加えられ、結局現代伝説に発展していく話も多くある。しかし、中国の学術研究の実態を見ると、現代伝説に対する研究は不十分で、論文や書籍が少ないだけでなく、これまで行われてきた先行研究についても、さまざまな問題を抱えている。

一、研究の背景と目的

一九八〇年代に常光徹が報告した、「学校の怪談」という近代における学校の場で生起する世間話が、多くの人々に注目された。^②この報告は、学校が口承文芸研究のフィールドになるという新たな視点を示してくれた。

学校という特定環境の中で流行っている「学校の怪談」は、外の世界から隔離された「小さな世間」で生まれる語りである。「日常生活の雑談」「身のまわりの奇事異聞」など世間話的な性

質だけでなく、現代伝説が持つ「友達の友達から聞いた」などの特徴もしばしばうかがえるので、現代伝説の「ジャンルと言っても差し支えない。そうした学校の怪談から、キャンパスライフの実態や学生同士の人間関係、学校教育の問題点、学校と外部社会のつながりなども見えてくる。

ところで、本論文は三つのことを目的としている。まずは、中国における現代伝説研究の現状を報告することで、中国で有名な「学校の怪談」を紹介したい。続いて、私が行ったアンケート調査の結果に基づき、日本で報告された類話との特徴を比較する。最後に、日中の「学校の怪談」に隠されている意味と機能を明らかにする。

二、中国における現代伝説研究の現状

中国で最も利用されている学術データベースといえば、「知網」⁽¹⁾「万方」⁽²⁾が挙げられる。二〇一八年八月現在、「都市伝説」(Ⅱ現代伝説)「現代传说」(Ⅱ都市伝説)「校园传说」(Ⅱ学園伝説、学校の怪談)「网络鬼故事」(Ⅱインターネット上の幽霊譚、怖い話)などのキーワードを入力すると、およそ四十本弱の関連文献が出てくる。

一九八八年に、現代伝説の研究者としてよく知られているアメリカのブルンヴァンが編纂した『消えるヒッチハイカー』の日本語訳が出版された。この本の中国語訳の出版は二〇〇六年で、日

本より研究がはるかに遅れている。しかも二〇〇八年までの論文を読むと、『消えるヒッチハイカー』などブルンヴァンの理論を追うばかりの内容が多く、中国独自の話への関心が欠けている。

二〇一〇年代に入り、「スリングショットで遊ぶ子供が老人を誤って射殺し、老人の家族の怒りを買う、子供自身が副葬品として老人の棺に入れられる」という「人殺しのスリングショット」の話が現れ、一時的な話題になった。また、「上海のある高架橋を支えるための柱を作る際に、建設会社側がお坊さんを誘い、その地下に眠る龍神を天に昇ってもらおう」という「上海九龍柱」⁽³⁾の話など、中国独自の話もようやく注目され始めてきた。

だが、ほとんどの中国人研究者は、アメリカの研究者が唱えた分類法をそのまま用いるだけで、中国の現代伝説の実情に合わせて整理し、解釈していない。また、英語圏の成果だけに偏っており、最初に都市伝説(フランス語の「legende urbaine」)の概念を発表した、フランスの社会学者であるモランへの注目もない。もちろん、日本の現代伝説研究への関心も薄い。

中国における現代伝説研究の先駆者を紹介すると、『消えるヒッチハイカー』を中国語に訳した李揚⁽⁴⁾とブルンヴァンの論文を輸入した張敦福⁽⁵⁾が挙げられる。それ以外の「学校の怪談」について言えば、北京や上海の大学で語られている怪談に関する論文を発表した鞠熙⁽⁶⁾、張婷⁽⁷⁾、魏泉⁽⁸⁾などがあり、山東大学の怪談と校史との関係を分析した馬星宇⁽⁹⁾もその一人に挙げられる。しかし、いずれも「話の紹介文」あるいは「少人数制の聞き取り

調査」の段階に留まっております、本格的な研究とは言えない。

三、「学校の怪談」の日中比較

日本と中国で刊行された、「学校の怪談」をまとめた出版物から三冊を選び、取り上げられている話をデータとして、話の内容と語られる場における日中比較を試みた。⁶⁾ これらの本には、日本と中国でよく聞ける典型的なパターンの話が多く収められている。日中の「学校の怪談」の全体像を完璧に代表できると言いにくい、现阶段の参考文献としてはそれなりの価値があると考ええる。

(一) 怪異の分類

「心霊体験系怪異」は、校舎、寮などさまざまな施設で体験する心霊現象、もしくは降霊術や占いにまつわる怪談を指す。主観が多岐にわたっているので、具体的な特徴を一括りにするのは難しい。「七不思議系怪異」は、キャンパスにある特定の場所が怪異や禁忌の対象となる怪談を指す。「トイレ系怪異」は、トイレ、バスルームなど排泄や入浴にまつわる施設にこだわった怪談を指す。「非オカルト系怪異」は、超自然的なものと関係しない話を指し、人間関係や試験の裏話が多い。「怨霊復讐系怪異」は、中国で見かける特殊な話で、事故、自殺などで亡くなった学生や教員の霊が復讐してくるという話を指す。日本の文献にも時々見かけるが、中国ほど多くはない。次の図1が、その円

グラフである。(図1)

図2は語られる場を「小学校」「中(高)等学校」「大学(院)」「不明」という四つの分類で話の舞台を区別した。(図2)

(二) 「トイレ系怪異」の共通点と相違点

紙数の都合上、「トイレ系怪異」と「七不思議系怪異」だけを取り上げる。

〈日本〉「赤いマントはいらないかい」(小学校)

小学校の四階の図書館前の女子トイレの入り口から数えて四番目のトイレはいつも故障していてドアが開かない。しかし夕方四時四十四分になるとドアは自然に開いて人を招き入れるという。

中に入ると、「赤いマントはいらないかい?」という低い声が出てきて、返事をするまで何度も聞き続けるのだ。下手に「はい」と答えると、上からものすごい音と刃物が首に落ちてきて、首から下の背中に赤いマントのような血の服ができるという。だからみんな近寄らなかつた。

(野村純一・松谷みよ子監修 『いまに語りつくす日本民話集』
— 大きな活字で読みやすい本 〔三〕 一一 学校の怪談 〔一〕

〈中国〉「赤いベスト」(大学(院))

いつの話だったのか誰も知らないが、ある師範大学の女子寮

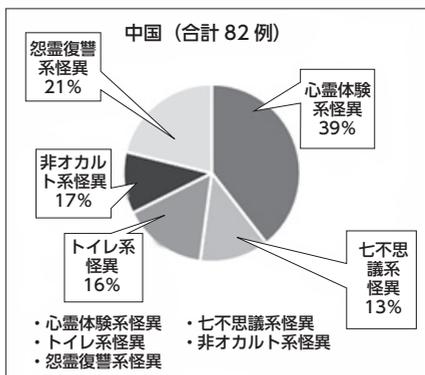
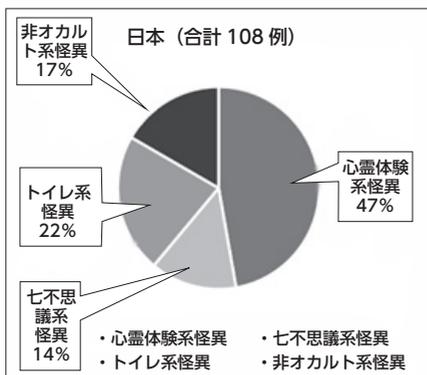


図1 話の内容における比較 (三冊の出版物より抜粋)

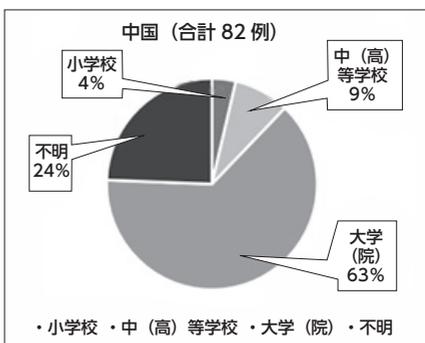
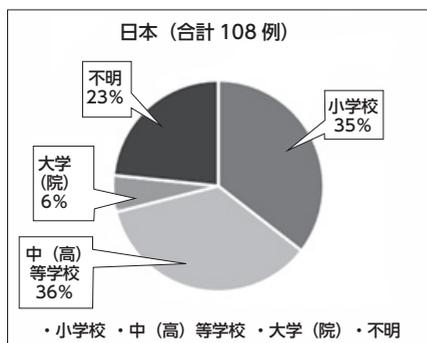


図2 話が語られる場における比較 (三冊の出版物より抜粋)

で起こった、本当の出来事だそうだ。

入学の時期は九月なので、まだ暑さが残っている。一年生の女の子、静ちゃんは夜遅くまで勉強していて、寮に戻ったらすぐシャワーを浴びると決めた。シャワーの途中、突然に外から「赤いベスト〜赤いベスト〜赤いベストほしいかい?」という声が聞こえた。

「赤いベストほしいかい」みたいな声が聞こえたら、絶対に返事しなきゃだめだぞ、先輩からそんな話を聞いた覚えがある。どうせ誰かがふざけていると思って、静ちゃんは考えもせず、「ほしいよ!」と大声で答えてしまった。「本当?」外から返事が来た。「当たり前でしょう!」これはいたずらに違いがないと彼女は確信した。「じゃあ、あげる。」その声が直ちに消えた。

翌日、ルームメイトはみんな起きたのに、静ちゃんはまだ眠っている。いつも早起きをするはずなのに、何で今日に限ってまだ起きてこないのかとルームメイトたちは怪しんだ。

布団をめくると、なんと彼女の皮膚はきれいに剥がされた。まるで赤いベストを着ているような、血だらけの体になっていた。

(王小影『城市伝説…都市最驚悚鬼故事集』)

話の内容を読みながら、その共通点を考えてみる。日本でも中国でも「赤い〇〇を聞かれると血だらけになる」という、トイレにおける「色問いの怪異」が見られる。女子トイレが話の舞台として登場する場合がほとんどで、男子トイレの事例は見られない。しかし、語られる場に着目すると、日本では主に小学校や中学校で伝承されている。これを民俗学者の宮田登は、「初潮を体験する前後の女子の独特の不安心理」と解釈した。

ただし、中国では大学のほうが舞台として登場する。「初潮」という解釈はここでは通じない。それより中国では、治安問題につながっていく例が見られる。

中国の大学には、校舎、食堂、運動場だけでなく、学生寮も敷地内に設置されている。広いキャンパスでは、美容院、スパー、郵便局などのサービス施設も見られる。キャンパスのすぐ外側には商店街やホテルもあり、「大学城」という日本人にはなじみのない、独特なエリアが形成されているのである。そういうサービス施設を利用する周辺の人が、自由に学校の敷地内に入ってくる。そして不審者も増え、結局人員構成が複雑になり、大学自体の治安が確保できなくなる。

薄暗いトイレやバスルームの中に潜り込み、学生の身分を装い、排泄中、シャワー中といった無防備な姿をする主人公に声をかけてくる人は特定できない。言うなら、学校の外部社会からの侵入者が、「赤いベスト」の正体ともなりうる。なお、近年、中国のマスメディアも、大学周辺やキャンパス内で犯罪に巻き

込まれ、拉致されて行方不明になる、さまざまな事件を報道している。ある大学では女子トイレ殺人事件も発生し、大学生の「危機意識をより一層強め、トイレにまつわる怖い話がさらに語られていく素地がある。」

つまり、中国で聞ける類話は社会問題とも関係しており、警告的なモチーフを含んだ傾向がうかがえる。

(三) 「七不思議系怪異」の共通点と相違点

「トイレ系怪異」だけにとどまらず、中国で見られるほかの「学校の怪談」の分類にも、大学生、大学教育をめぐる現状が類繁に姿を現す。

〈日本〉「真夜中に鳴るピアノ」(大学(院))

群馬大学の話。昭和二十四年頃、学芸学部の校舎の講堂で真夜中ピアノの音が聞こえる。結核の女の人がピアノを習っていたが、体に悪いと止められ、こっそり弾いていた。そのうち悪化して死んだ。そのピアノのところにかき傷のような跡があり血がしたたり落ちている。鍵盤に血の跡があり、その通りに曲が鳴った。実際にみた人があるという。

(野村純一・松谷みよ子監修『いまに語りつぐ日本民話集
—大きな活字で読みやすい本(三)—』— 学校の怪談—)

〔中国〕「寮の出入り口に置かれた鏡」(大学〔院〕⁽⁸⁾)

北京師範大学珠海キャンパスの話。二〇〇三年に入学した人だったらみんな知っているかもしれない。最初、粵華寮で生活し始めたとき、出入り口に鏡はなかったはずだ。大学二年生の時期に入ると、そのあたりの建物の出入り口で、方形の醜い鏡が急に置かれたのだ。寮母さんに聞いてみたが、「学生たちに身だしなみをチェックさせるために、学校側が購入したのよ」との返事だった。正直なところ怪しいと感じている。だって、鏡なら寮のトイレにすでにあるじゃないか？

何週間も経て、別の建物に住んでいる女の子から事情の経緯を聞いた。

粵華寮女子エリアの××番ビル(新人生の間でパニックを起こさないよう、伏せ字で表示する……)に、うとうと寝ている何人もの女子学生が、白い服を着ている、長い髪の人を見つけた。その女、向こうのトイレから漂ってきて、シャワールームの奥まで入り込んだ。「漂う」っていう表現を注目してください。彼女に足が生えていないみたいからだ。

女を目撃した一部の寮生が学校側にこれを報告した。そして学校のスタッフが、風水学の専門家を密かに招いてきた。専門家の意見によると、寮の出入り口のところに鏡を置けば、夜遅く帰る学生は後ろについてくる霊を発見できるのだ。

両国の共通点を考えれば、「学校のどこかにいろいろな怪異が

あるが、解消の方法がない」というところであろうか。「寮の出入り口に置かれた鏡」という話の最後が、そのことを暗示してくれているように見える。実は、鏡で霊を発見しても何の役にも立たないのではないかと思う。つまり、話の重点は怪異をなくすということではなく、「同じ学校の学生だ」というアイデンティティを確認するための語りとして、あるいは不確かな事件として、伝承され続けることが肝要である。学生が「七不思議系怪異」を語ることによって、「なるほど、うちの学校にこういう話があったのか」「建物、学科、人物など具体的な名前も出ているし、本当のことかもしれない」という感情に訴えることで、独自の学校文化を構成していく。

しかし、中国の類話に出現する鏡の役割を無視すべきではない。ここでは、「風水学の専門家を招く」ことで「鏡を置くこと」によって、鏡に背後霊が映される」という知識を得るのである。中国の「学校の怪談」には道教思想が込められている。ほかの大学でも、「キャンパスの鳥瞰図が棺のように見えているので、風水的に縁起が悪くて凶事も多発する」など、風水学に関わる怪談が語られている。つまり、中国の類話は土着宗教、民間信仰の影響を深く受けているのである。前述の馬星宇も論文の中で、「易经研究が看板の山東大学で聞ける怪談には、風水学の話が圧倒的な割合を占めている」という調査結果を報告した⁽⁹⁾。

四、「保研路」——現実味を帯びた「非オカルト系怪異」

本章で取り上げるのは、中国で有名な「保研路」の話である。この話に関するアンケートの結果（図3）を見ると、約七七パーセントの回答者が「聞いたことがある」と答え、話自体の知名度が極めて高いと言える。

題名を翻訳するならば、「大学院推薦入学への道」の意味になる。この話は、大学院の裏口入学事情を中心として展開される語りである。日本では代表的な類話を見出すことができない。

(一)「保研路」の諸事例

中国のインターネット上でこのようなバージョンが流布している。特定の大学が風評被害の対象になる可能性を考慮したうえで、学校名を伏せ字で表記した。

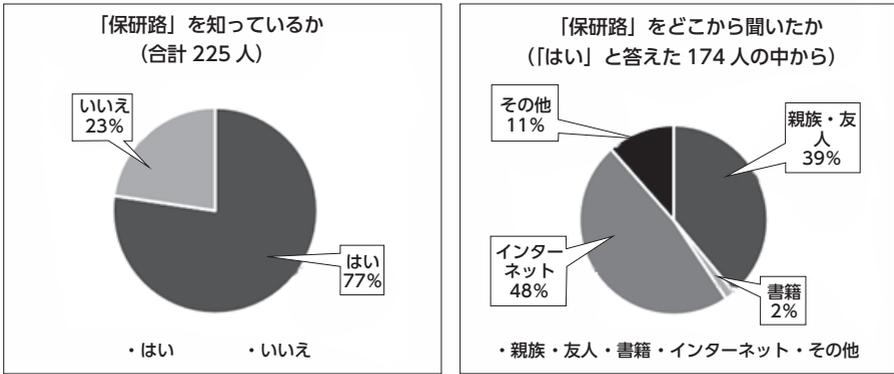


図3 中国人向けアンケート調査の結果、「保研路」に関する質問項目だけを取り上げる
(調査実施：2017年7月17日から同年12月26日まで)

事例一 (甘肅省L大学)⁽¹⁰⁾

うちの大学の新しいキャンパスは、町の中心部から四十分ぐらいの距離が離れた郊外にある。今でも修築が続いている。学校側は目立たせたくないと思って簡単に事件を済ませたが、ある法学部の先生は、法律の公正さに関わる授業で、これを例として講義をやっていた。事件の流れはこういう感じかな。

うちの学生寮はね、普通夜十一時にドアを閉めるのだ。でもその事件の被害者となった女の子は、ある日、十二時になっても戻って来ない。工事中のビルの近くで彼氏とデートしているからだ。そこに近寄る七人の農民工^{のうみんこう}に見られて、集団レイプされたの。信じられないのは、あの彼氏ってね、自分の恋人をまったく助けず、逃げてしまったってことだ。レイプに遭った女の子は、学内推薦の資格を取って大学院に行けたって。

事例二 (天津市T大学)⁽¹¹⁾

二〇一一年、知り合いの女の子のブログから見た話。彼女はその大学の学生。そこに通っているある女子大生は、夜中

のトイレに行くとき、突然に現れる数名の男性に集団レイプをされてしまった。レイプをやったのは農民工なのか、警備員なのか？ もう忘れた。何回も犯され続けたので、子宮摘出手術をしないといけないくらいに至っていると聞いた。学校側がこれを隠したくて、妊娠不能となった彼女への償いを考えたのだ。なんと、五年一貫制博士課程の入学資格だつて。同じ寮に住む彼女のルームメートも、学内推薦で修士課程に進学したみたいだ。

さっきの話はトイレで起こったことだが、その大学の敷地内、「保研路」と名づけられたもう一つの小道もあるし、毎年レイプ事件が起こるそうだ。

中国全国の大学で数多くの類話が語られているが、基本的なパターンは、「キャンパス内およびキャンパスの近くで、性犯罪に遭遇した女子大生は、「大学院推薦入学」という学校側が提出した口止めの条件を受け入れ、警察に通報せず、怨念を抱えているにも関わらず、大学院進学希望をかなえた」となっている。これらの事例では、暴行を行う農民工や警備員、適当な態度で処理する学校側など、学校の関係者が加害者として登場する。「推薦入学の資格を授ける」ことで「犯罪事件を簡単に誤魔化す」という衝撃的な結末は、話のクライマックスと言える。

飯倉義之が、「現代伝説は性、犯罪、陰謀、怨念などアンダーグラウンドなイメージの言説として消費されるようになる」と、

日本での、一九九〇年代半ば以降の現代伝説のコンテンツ化現象を指摘した¹²⁾。中国の話とはいえ、「保研路」は性、犯罪、陰謀、怨念などいずれのイメージも備えており、現在でも話題として中国の電子掲示板で「電承」されている。すなわち、「ネットロア」というSNSコンテンツの形でその生命力を保ち、大学生のコミュニティで語られ「消費」されていくのである。

(二)「保研路」に隠されている社会問題

①差別問題

なぜ、中国で「保研路」の話が生まれたのだろう。前述の「大学城」の問題が一つの理由であり、二つ目には、社会的な弱者への偏見が考えられるのではないだろうか。

これらの事例に、加害者とされるほとんどの登場人物は「農民工」なのである。農民工は中国の戸籍制度によって生まれた独特の概念なので、詳しく説明すると話が長引いてしまうので、簡単に言えば、農村の戸籍を持ちながら都市で働く農民のことである。中華全国总工会研究室の調査によると、二〇一〇年時点の農民工の八割が建設業、製造業などの第二次産業、二割が運輸業、卸売業、宿泊業・飲食サービス業などの第三次産業に就業している。教育機関の警備員職、工事現場の肉体労働職に就いている人も少なくない。しかも農村から都会に出て、高い学歴を持たない人が多いので、底辺階層と差別される場合が非常に多い。農民工向けの労働法が整っていないため、彼らは低

賃金など社会保障などの問題に悩まされている。そういう彼らを社会的な弱者と名づけても過言ではない。

およそ十六年前に、中国の吉林大学が、中国で有名な「羊城晚报」「北京日报」「新文化報」など新聞社の報道から農民工に関する内容を統計し、農民工の公的なイメージを解読するための調査を行った。二〇〇二年から二〇〇三までのニュースを取り上げ、そのうち農民工に対するネガティブな報道がなんと全体の六一パーセントも占め、強盗、性犯罪にまつわる記事も多かった。「農民工のコミュニティは危険だ」という偏見が広まっている中で、中国のマスメディアもそれに加担した。

このようなステレオタイプの考え方を前提とすれば、学校で犯人不明の暴行事件が起こったら、容疑者として浮かんでくるのは身近な同級生、教員など「エリート」とされる存在ではなく、校舎の工事に関わってくる農民工である。そこで、農民工が性欲の塊に化して女子大生に手を出すと、一般の大学生たちも想像してしまふ。

②教育問題

そして三つ目は、「功利主義的な大学院進学ブーム」という問題である。

大学進学が大衆化した日本では、就職活動が必要とされるものはコミュニケーション能力と大学生活そのものであり、大学院でさらなる高学歴を得ることがあまり重要視されていない。それにひきかえ、中国では一人っ子政策が実施されて以来、子

供の教育に注ぐ情熱は高まる一方である。一九八〇年代から始まった「改革開放」にともない、社会階層の構成にも急速な変動が起きている。新たな階層形成過程の中で、学歴重視の傾向が見られるようになった。学校教育は社会的な地位を達成する重要な経路となり、高学歴の獲得が社会的な地位の上昇にとつては最も有効な手段とされている。

『二〇一六年度国際人才藍皮書…中国留学発展報告』により、海外留学を選ぶ中国人の数がすでに五百万人を超えている。世界中の名門校を卒業したエリートが急増し、就職の競い合いが一層厳しくなるのは言うまでもない。これまでの十年間の大学院入試実施状況(図4)を分析すれば、中国国内の出願者がますます増え、学歴による格差も激化し、大卒だけでは就職しにくくなるという現象が始まったことが推測される。より高い年収を得るために、より有名な企業に就くために、エリートの代名詞である「大学院卒」の肩書きを求めなければならない。だが、日本での大学院入試制度と異なり、中国の学生は大学院に進学するには、「全国碩士統一招生考试」(全国大学院博士前期課程センター試験)を受験する必要がある。合格基準点など複雑なルールが多数定められており、全体的に入りにくいというイメージが強い。「センター試験に参加する必要がある」推薦入学制度が、最も手軽な手段とは言えるのである。

「レイプされたのはちょっと悔しいが、もし推薦入学をされれば、貞操も大したことになる」など、「大学院への近道が見

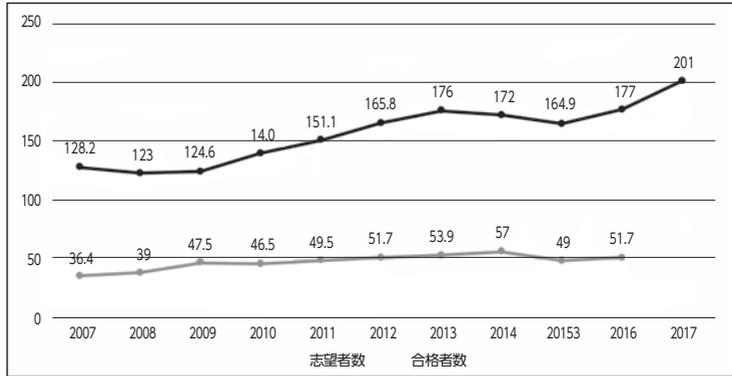


図4 中国における大学院入試実施状況の年次推移表(2007年~2017年)
単位:万人 2017年度の合格者数は不明

「金目当て」「地位目当て」の大学院進学ブームを風刺している。

また、中国で古くから伝承されてきた、儒教文化における「性は恥」の価値観から考えると、性犯罪による被害は、悲劇というより恥と見られるのが普通である。この「性は恥」

男性を中心とするパリエーションが見られ始めた。¹⁴しかし、こちらのパリエーションは笑い話として語られる場合がすくぶる多く、「同性による性犯罪の注意喚起」というポイントが無視されている。この点で中国の性教育問題がさらに浮き彫りになってきた。

何と言っても確実な証拠が見つけれないので、「保研路」その話の信憑性を考察するのは今後の課題と言える。

おわりに

歴史的な民間伝説と同じく、現代伝説もある物事の由来、ある階層の実態、ある時代の世相を語ったりする。ただし、現代伝説の中で、悲劇、社会の闇といったネガティブなものがその大半を占めており、教訓的なメッセージとしての色彩が濃い。「学校の怪談」を通して、キャンパスの隅々に潜んでいる危険を見極めるといふ点で、女子学生の不安を中心とする語りが多く、彼女らの防犯意識を高めていくのに役立っている。

広義の現代伝説も「学校の怪談」も、話自体の信憑性に関係せず、学生がこういう話を不確かな情報源と扱い、学校の歴史と日常茶飯事などへの興味や思考を示し、他人と分かち合うことで、学校という「小さな世間」での人間関係を築いていく。ある意味では「学校の怪談」が社会的な機能も果たしている。

「中国人の男子留学生が、海外で同性愛者のレイプ魔に犯され、大学院推薦入学と永住権発給の賠償をもらった」など、海外での

ろう」という疑問点が残されている。中国でほとんどの大学に寮が設置されており、一人暮らしのケースは日本の大学生より多くはない。しかも、一つのルームに一般的に四人や六人も住んでおり、教室以外での人間関係が形成されるのである。こういう怪談もおそらく大学寮で盛んに語られ、より広い範囲(他校やインターネット上)に流布されていくのではないかと考える。

また、本論文が用いた日中の事例には、時代の差があるという論点は否定できないが、ここで若干の補足を加えたい。日本では、常光徹など先行研究者の力で、学術関係の専門書以外でも学校を舞台とする怪談文学、ホラー映画、子供向けアニメも爆発的に登場し、一九八〇年代から一九九〇年代まで「学校の怪談」ブームが一時的に流行っていた。ほかにも、玉水洋匡などの研究者がそれよりも古い明治・大正時代の旧制師範学校で語られる怪談を素材として扱い、論文を公表した。二〇一七年に私が行った日本人向けの現代伝説アンケートでは、小中学生の回答者も協力していただいたが、彼らが報告したほとんどの「学校の怪談」は「トイレットの花子さん」「四時ババア」など昭和時代の話で、新しく生まれた話がなさそうに見える。日本語で作成された大半の関連文献も二十世紀の話を収録しているし、「学校の怪談」ブームがすでに立ち去ったのではないかと思わずにはいられない。

一方、中国では一九八〇、一九九〇年代生まれの「学校の怪談」もあるが、ブームとして本格的に流行り始めたのは二〇〇〇年以降のことだと考えられる。「医学部の怖い話」などをネタとす

る、当時の中国ホラー文学の奮起と何らかの関係がある想定される¹⁵⁾。そればかりでなく、ブームとして姿を消しつつある日本の「学校の怪談」とは異なり、現在でも中国のインターネット上(SNS媒体が中心)で「学校の怪談」が人気を集めている。だが、学校教育も学術研究も完全に止まっていた文化大革命の時期に、「学校の怪談」が生まれたのかどうか、生まれた場合でもいかに語られたのかについては不明なままである。もちろん、大正時代・昭和初期に相当する中華民国時期の資料も見出すことができない。日中の同時代の「学校の怪談」を並べて比較するのは、とつてい難しいことであろう。

中国の現代伝説研究にはまだ研究不足であるが、今後の進展と新たな研究者の活躍に期待したい。

注および出典

(1) 「微信」とは、中国のIT企業「騰訊」^{テックセント}が開発した無料のインスタントメッセージアプリ。「LINE」とほぼ同じ機能が並んでいる。二〇一一年一月に中国でサービス開始。アプリ内の「朋友圈」機能で、自分の近況をつぶやいたり、ニュースやウェブ記事をシェアしたりするのができるが、疑似科学、陰謀論など偽情報の温床ともなっている。

(2) 常光徹「学校の世間話」『昔話伝説研究』二二号 一九八六年 昔話伝説研究会 一一一—三四頁

(3) 「知網」— <http://cnki.net/>

「万方」— <http://www.wanfangdata.com.cn/index.html>

- (4) 「人殺しのスリングショット」とは、二〇〇四年頃からインターネット上で流行り始めたフェイクニュース。それ以降、電子掲示板などでの拡散によってさらに知名度が上がり、現代伝説に発展してしまっている。「上海九龍柱」とは、一九九五年頃（高架橋の柱が作られたその時点）から流行り始めた現代伝説。法事の主催者であるお坊さんが龍神の居場所を洩らしたせいで、神に天罰を下され、龍神昇天の直後に彼も他界したという。

- (5) 鞠熙（北京師範大学—「当代大学生宿舍中流传的鬼故事分析」、張婷（北京師範大学—「当代校園恐怖伝説研究—以北京師範大学の個案为中心」、馬星宇（山東大学—「校園驚魂：校園恐怖伝説探析—以山東大学校園伝説為例」が執筆した論文は出身校に関わるもの、魏泉（若有若無…中国大 학교 校園伝説的個案与類型」が執筆した論文は中国の教育機関で伝承される「学校の怪談」の全体像を関わるもの。
- (6) 日本の場合には『いまに語りつぐ日本民話集—大きな活字で読みやすい本（三）』—「学校の怪談」を使用。中国の場合には『城市伝説—都市最驚悚鬼故事集』『校園鬼故事』を使用。

- (7) 有名なのは二〇一一年五月の「煙台大学女子トイレ連続殺人事件」と同年十一月の「東莞理工学院女子トイレレイプ殺人事件」。

(8) <http://tieba.baidu.com/p/2549554982>

- (9) 「易経」とは、中国の古典である「五経」の一つで、占術の

理論と方法を説く書。風水ともある程度の関連性を持つ。山东大学がこれの研究機関として有名。

- (10) <https://www.zhihu.com/question/20882654/answer/20626960>
- (11) (10)と同じく、中国の大手電子掲示板「Baidu Tieba」に掲載されていたが、現時点は閲覧不可。リンクが削除された可能性もある。
- (12) 飯倉義之「都市伝説とメディアの変遷—都市民俗・ネットロア・SNS—」「こえのことはの現在」二〇一七 三弥井書店 一六八—一八二頁

(13) http://www.sohu.com/a/190310166_619042

(14) <https://www.douban.com/group/topic/80652442/>

- (15) 二〇〇〇年代初頭、中国の有名電子掲示板「天涯論壇」の「蓮蓬鬼話」版（怖い話を中心の版）でホラー系ネット小説ブームが巻き起こり、「医科大学で体験した本当の怖いこと」など真実と名乗るスレッドも山ほど立てられた。「蓮蓬鬼話」版からも数名の人気作家が誕生し、高校や大学の怖い話に着目しながら数冊のホラー小説も創作した。このブームは、中国での「学校の怪談」の流行りに何かの影響を及ぼしたという可能性はなくもない。

参考文献

朝里樹『日本現代怪異事典』二〇一八 笠間書院

王小影『城市伝説—都市最驚悚鬼故事集』二〇〇六 光明日報

出版社

海力波「小孩彈弓殺老人…一則當代伝説中的道德困境与集体焦慮」

『民族芸術』一三七 二〇一七 広西民族文化芸術研究院 八七

一九七頁

喬晋建「中国におけるCSR活動—農民工の労働権利保護を中心に」

『産業経営研究』三二 二〇一二 熊本学園大学付属産業経営

営研究所 六七—九〇頁

魏泉「若有若無…中国大学校園伝説的個案与類型」『民俗研究』

一〇二二二〇二二 山東大学 一二六—一三五頁

黃達安「妖魔化与權利關係再生産—国内報紙対農民工報道的分析」

『西北人口』三〇(三)二〇〇九 甘肅省計画生育委員会 三二五

—四〇頁

蔣純青「中国における学歴格差社会」『専修大学社会科学研究所月報』

五八八二〇二一 専修大学社会科学研究所 三二—五八頁

田代美江子「東アジアにおける性教育の制度的基盤—韓国・台湾・

中国と日本」『現代性教育研究ジャーナル』三六 二〇一四 日

本性教育協会 一—七頁

DILIBERAIL「中国における大学立地の進展と周辺地域の変容」

『埼玉大学大学院文化科学研究科博士学位論文—論文内容の要旨

及び論文審査結果の要旨』一二 二〇一五 埼玉大学大学院文

化科学研究科 一—七頁

玉水洋匡「学校の伝承」の総合的研究—『七不思議』と『ガッコ

ウ』の関係性—『伝承文化研究』八 二〇〇九 國學院大學伝

承文化学会 一一五—一二〇頁

趙軍・祝平燕「大学生性侵害与性教育関連性研究—一個以求全法

展開的個案」『雲南師範大学学报(哲学社会科学版)』二四六(二)

二〇一四 雲南師範大学 七一—七七頁

張宝瑞「校園鬼故事」二〇〇八 江蘇文芸出版社

趙莉「網絡鬼故事研究」二〇一一 青海師範大学

常光徹「学校の怪談—口承文芸の展開と諸相」二〇一三 ミネル

ヴァ書房

日本口承文芸学会編「こえのこばの現在」二〇一七 三弥井書店

野村純一・松谷みよ子監修『いまに語りつぐ日本民話集—大きな活

字で読みやすい本(三)』一一 学校の怪談』二〇〇三 作品社

長谷川達也「現代中国社会における高学歴重視の現象とその背景」

『敬和学園大学学生論文・レポート集』二二 二〇一五 敬和学

園大学 二九—四八頁

馬星宇「校園驚魂：校園恐怖伝説探析—以山東大学校園伝説為例」

『民俗研究』一三〇 二〇一六 山東大学 一〇六—一一七頁

李奇志「論大学校園安全問題及应对措施」『瀋陽工程学院学报(社

会科学版)』四(二)二〇〇八 瀋陽工程学院 四二—四四頁

(り・けんう／國學院大學大学院博士前期課程二年)